

二〇二四年九月二三日

読み耽る推理小説長き夜
吊るされて阿鼻叫喚の唐辛子
家古りし籬に零余子這ふままに
田の神へ深く一札秋収め
畦散歩見まもり隊は案山子どち
秋声や石庭に聴く波の音

二〇二四年九月二二日

地の影と纏るごとく秋の蝶
鈴虫も寝たやうだから本を閉ず
相槌の返らずなりて夫昼寝
昼の虫鋏に凭れて立ち休む
爽やかにふれあふ音や祈願絵馬
吾を囲む試歩の一步に赤とんぼ

二〇二四年九月二一日

豊の秋朝日に綺羅と露浄土
スプリングラー穂先に虹の立ちにけり
霧襖抜けて高野の奥之院
海風に噴水の秀の揺らぎけり
小流れに水引草の揺れやまず
せせらぎへ迫り出すカフェや虫浄土
林道の空の高きを鳥渡る
縁揃ひ百畳の堂秋気澄む

二〇二四年九月二〇日

秋の日の水かげろふや櫓門
家蜘蛛のものはや家族となりし居間

澄子

えいじ

澄子

みきお

あひる

うつき

風民

たか子

あひる

千鶴

ぼんこ

そうけい

やよい

よし女

明日香

えいじ

むべ

澄子

幸子

もとこ

むべ

あひる

笠も無くバテて傾く案山子かな

秋澄みて野点の水の甘露かな

弁当は地産地消や野路の秋

二〇二四年九月九日

秋澄むやひだりは愛宕みぎ比叡
水底に届く日差しや鮎の影
唐門は極彩色や小鳥来る
久闊の握手汗の手はばからず
雑草に紛れまじとて蜚草
綱引きの相手は大地草を引く
茶会果て闇に夕顔白々と

二〇二四年九月八日

涼新たな妻は新作料理中
館涼し京三川を一望す
独り居の二人の夕餉初秋刀魚
日焼け子が当てくじの箱かき回す
畔ゆけば先へ先へと飛蝗飛ぶ
人混みに踏鞴を踏みし秋神輿
秋雲に透けて翼下に八ヶ岳

二〇二四年九月七日

小鳥来る教室ごとに世界地図
朝風に金色なびく稲穂波

ふさこ

風民

なつき

せいじ

みきお

むべ

うつき

ぼんこ

風民

風民

せいじ

むべ

うつき

なつき

えいじ

澄子

むべ

澄子

むべ

毎日句会みのる選・二〇二四年九月一五日